Mindanao Children's Library Foundation, Inc. SEC REG . NO. CN20031 5083

２００９年１０月号・季刊２５号

ミンダナオの風

執筆編集＊松居友　　発行：ミンダナオ子ども図書館

世界的な経済危機が
貧困層を襲った
山の辺境に追われたマノボ族
現金収入がほとんど無い彼等にとって
ちょっとした米や塩の値上がりが
そのまま、家庭の悲劇に直結する
サトウキビ農場の日雇いの仕事も
経済危機ゆえに削られて
給与も安く抑えられ
子どもを学校に行かせるどころか
日々の食事にも困るありさま
背に腹は代えられず
バナナ農園に盗みに入り
捕らえられて拘置所に入れられ
父親が、いなくなってしまった子もいる
金持ちは、経済サバイバルゲームに必死になり
貧しい者たちは、ますます貧しくなる
自由主義グローバル経済
今年、ミンダナオ子ども図書館に住みこむ子は
八〇名近くに達した
ほとんどが、三食食べられない
山から来たマノボ族と
戦闘地で難民生活をくり返している
イスラム教徒の子たちだ

Mindano Children's Libary Foundation, Inc.
MCL
SEC REG.NO.CN200315083

ミンダナオの概況

ミンダナオ情勢は、相変わらず良いとは言えない。散発的に起こる戦闘。

ＭＩＬＦと政府軍の対立もあるが、リドーと呼ばれる地域の実力者どうしの争いも起こる。総選挙が近いことも影響しているだろうが、同族どうしの争いだから規模は小さいものの、国家レベルの出来事ではないかというと、そうでもない。

常に書いているように、戦闘は作られる。地方有力者も、中央政界や国際レベルの団体とつながっていることも多く、小さないざこざが発端で大きな戦闘が作られることも多い。（詳細は、サイト検索「ミンダナオ子ども図書館」）

こちらの選挙は、地域の金持ちの有力者が立候補するので、こうした人々はほとんどがけた外れの大地主たちだ。彼らは日本では考えられない広大な土地を所有し、大勢の小作を有している。いわば荘園のようなもので、小作に武器を渡すとたちどころに私兵に変わる。

戦闘で焼けた家

選挙で、当選できるか否かは、国家の金もそうだが、ミンダナオのような資源の豊富な場所では、海外からの利権がらみの経済支援も落ちてくるから、国際ＮＧＯの支援も含めて、支援が得られるか否かは死活問題なのだ。

いざという時には対立候補やその親戚を殺害する、事ぐらい考える。

時には敵対する住民の家を焼き、地域の人々を避難民化させる。上の写真は、今回避難民救済で向かったＡＲＭＭイスラム自治区の集落。戦闘で２８の家が焼かれ、４００世帯が避難民化した。

避難民に古着を支援する奨学生

私たちはＤＳＷＤ（福祉局）といっしょに、焼け出された人々や子どもたちに、皆さんから送られてきた古着を配った。ＤＳＷＤの方は、ＥＵ経由のＷＦＰ（ワールドフード）の支援で、食糧を提供した。

緊急支援だけでは平和は実現できない

もともと、ミンダナオ子ども図書館は、大量の避難民が出ている現場に衝撃を受けて始めたＮＧＯだ。

私には児童図書の編集者や作家としての体験はあったが、専門的にＮＧＯに関心を持ったことも、開発支援について学んだこともなかった。そもそも、ＮＧＯを作ろうと思ったことなど一度もない。

先日、奨学生たちとのミーティングの場で、こんな話題が出た。

「ミンダナオ子ども図書館の創設者は誰だと思う？」

子どもたちは、一斉に「トモさん！」

「違うね」と、私。

「エッ、じゃあ、誰なの？」

「創設者は神様。

英語でゴッド、アラビア語でアッラー、マノボ語でマナマ。

管理者は、イエスといったところ。

ぼくは、君たち同様、彼等の下で働く、一人の働き手にすぎないんだよ。

いわば労働者ってところかな・・・」

２段目は、働き手の労働者（避難民に衣類を渡している奨学生たち）の写真。

話がそれたが、初めて悲惨な難民キャンプを見てスポット的な支援では、平和は実現できないと思った。

それゆえに、ミンダナオ子ども図書館の活動を始める時には、活動の根幹に文化を置き、大枝に教育、医療、難民救済、子どものシェルターなどを配置。全ての活動許可登録を総体的にフィリピン政府に提出した。

何故、ミンダナオ子ども図書館が、図書館でありながらスカラシップを出し、医療をし、難民救済をやり、保育所や学校を建てる手伝いを合法的にしているかの理由だ。

特集　マノボ地域の状況

近年になく、先住民族の置かれている状況は厳しい。

世界的な経済崩壊が、この様な辺境の地にまで影響を及ぼすとは思いもしなかったが、現代社会では、土地や財産を持たない人々ほど、容易に生活崩壊の危機に立たされるのだ。まるで赤子の手をひねるかのように・・・。

グローバルな資本主義経済がもたらした悲劇。

ミンダナオ子ども図書館には、マノボ族、バゴボ族、ビラーン族、マンダヤ族がいるが、圧倒的にマノボ族が多い。もともと、ミンダナオは、彼等の居住地だったし、西南の地域にイスラム教が伝播しても、共存互恵できわめて平和な社会を形成していた、と言われている。

ミンダナオ子ども図書館のマノボデー

問題は、４００年前、スペインの人々が植民地を求めて入り込んだ頃から始まる。植民地主義は、キリスト教（カトリック）をこの地に広めはしたが、その本質は土地所有を基盤にした経済利権の拡大だった。

近年では、戦後アメリカの植民地から政治的な独立を保証されると同時に、自由と民主主義を広めはしたが、現代のグローバル自由主義経済の発想と同様に、その本質は土地占有を基盤にした経済利権の拡大だった。

マノボの奨学生の家

とりわけマルコス時代、経済と軍事力を持った先進国が、豊かな農業と鉱物資源を求めて、プランテーションと呼ばれる経済植民地的な土地所有を拡大、もともと住んでいた先住民や西のイスラム教徒を排斥し始めた。

軍事力を利用した経済侵略による土地所有は、先住民族の地域では、イラガ（ネズミ）と呼ばれる移民系のクリスチャンで組織される暗殺集団が活躍した。

やり方は現在のイスラム地域に置ける戦闘もほぼ共通していて、武器を与えられた農民や民兵が事を起こしたり、イラガという暗殺集団が暗躍したりして、そのことをきっかけに、反政府勢力が対抗。

子沢山のマノボの家族

さらにそれをきっかけに、政府軍が予期していたかのように（反撃）を開始。戦闘状態となり、住民は避難民となって村を放棄。

帰ってみると政府から移民系の人々に土地は受け渡されていて、より辺境な山岳地へと移住せざるを得なくなったと言うものだ。

これは、ミンダナオ子ども図書館の奨学生たちが来ている村の中年以上の人々から、何度も聞いた話。ごく近年の事だったりする。

こうした戦略は、ムスリム地域を含めて現在進行中で、かつては狙いは耕作地だったが、今は、資源なのかもしれない、と思ったりもする。

不幸は、先住民族側だけではない。移民した人々も、その後、反政府組織に殺害されたりしている。

彼等にしてみれば、政府の指導による合法的な移住で怒りもしよう。そうした経過で、親を殺された移民系の奨学生もいる。しかし、移住民には合法的でも、先住している人々にとっては死活問題に関わる侵略だった。

こうして土地を追われた人々は、反政府感情を強く持つのが当然だから、ＮＰＡやＭＩＬＦと呼ばれる反政府ゲリラに変貌したりしたし、反政府組織も、こうした人々と接触することによって、勢力を拡大していったし、今も活発に動いている。

私たちも読み語りで、ＮＰＡの司令官に突然、話しかけられたりするが、ミンダナオ子ども図書館の活動は好意的に理解されている。

ミンダナオ子ども図書館は、困窮している人々を助けはするが、政治的または宗派的に動く団体ではないから。

資本主義は、一部に豊かな層を生みだすと同時に、一方では多くの貧困層を生んでいった？

勝ち組に入れた者たちにとっては、資本主義は福音だったが、土地を奪われ、財産を奪われて、辺境へ辺境へ、より地味の豊かでない山岳の傾斜地へと追われた先住民の人々にとっては、不幸の始まりに過ぎなかった。

彼等の多くは、教育もなく文字も読めず、社会情勢も世界情勢も、経済理論もわからないだけに、何が起こっているかも理解できずに、三食食べられないほどの極貧生活に投げ込まれた。

国道を車で走って、バランガイと呼ばれる集落の中心に降り立っただけでは、この様な状況はまったくわからないだろう。また、例え貧困に苦しむ村に足を踏み入れたとしても、見かけが朗らかで明るい先住民の人々を見ると、「貧しくとも心豊かな人々」といったイメージしか残らないことも多い。

事実、私自身もこの活動を始めた当初は、先住民族の人々の状況をそう捉えていたぐらいであるから・・・。

しかし、とりわけスカラシップを通して個人的に深く人々とつながり、状況を把握し、人々の困窮している様子。外には恥ずかしくて見せないような実態を知るにつけて、問題の根深さを痛感させられるようになった。

歴史的に概観すると、ミンダナオに本格的に移民が入ってきたのはマルコス時代だという。それまでは、ダバオやマティという東側に、荘園のような広大な土地を所有するスペイン系の人々がいて、ミンダナオ子ども図書館のあるキダパワン市も戦前まではマノボ族しか住まないジャングルだった。

近所の田んぼの落ち穂を拾って食料に

戦後、フィリピン政府は移民政策を奨励し、とりわけネグロスやビサヤ地方の人々が入植していった。その経緯は、アイヌの北海道に和人が入植していった経緯に酷似している。

まずは森林を伐採業者に託して、ラワン材など金になる木を切り払い海外に売る。木は大量に日本に輸出された。１９５０から７０年代である。私も小学校の頃、学校の工作にラワン材を使用したから知っているが、節もなく使いやすいラワン材が、現在私が住んでいるミンダナオから大量に輸出されたとは、ここに来て初めて知った事実。

昔はここも、ジャングルだった

ミンダナオに来た当初は、「熱帯地方なのに何と木のない場所なのだろう」と思った。丘陵も山の斜面も、ほとんどが裸の草地。焼き畑だけではこのような大規模な裸斜面はできない。

アポ山の自然保護地域にはいると、なんとそこには、見事な背丈のラワン材が巨人のように立っているし、背丈の３倍以上もあろうかというシダも生えている。昔はこの様な、壮大な奥深いジャングルだったことは明白だ。それをことごとく

ここがトウモロコシ畑だったと、誰が想像できよう

日本が戦後の経済発展のために利用したのだ。その結果、絶え間ない洪水が低地を襲うことになった。

現在問題になっている、ピキットやイスラム自治区での洪水被害も、こうしたことが原因。

土地を追われ、地味の悪い、耕作に適さない山岳斜面に追われた人々。それでも彼等は、細々と自給を続けてきた。

今でもそうだが、彼等の主食は、芋とバナナ。それもいつでも採れるわけではないので、一日2食がやっとという状態になる。米など買うお金が無いから、斜面にトウモロコシを植えるが、限られた面積でもあるし、日照も悪く、それとてたいした量にはならない。

いよいよ食べ物が無くなると、移民系クリスチャンの田んぼの落ち穂を集めたり、密かにバナナを盗んだりする。

最初は冗談かと思った言葉。

食べ物が無くなったらどうするか。「祈る」それでも無かったらどうするか。「盗む」という言葉は、今は実感として胸に迫る。

子どもたちに食べさせるものがない父親が、他に仕様もなく、ちょっとした盗みを働き、監獄に入っている例も多い。ミンダナオ子ども図書館にも、そうした経緯で父親が、監獄に入っている子も数名いる。お金があれば、監獄に入ってもすぐに身代金を払って出てこれるのだが・・・。

現金収入がほとんど無いと言って良い、先住民族の家族。彼等の子どもたちがほとんど学校に行けないか、または小学校に入学しても、1，2年生でストップしてしまう理由はすぐにわかろう。

現金が無くて困ること。

一、学校教育に必要な鉛筆やノートと言った学用品が買えない。

二、学校では、しばしばプロジェクトと称して、模造紙や工作用品などを買うように求められるが、もちろん買えない。

三、弁当を持っていけない。おかずもご飯もないから。お腹をすかせて午後の授業まで受けるのは苦痛。

四、加えて学校まで、五キロ、時には七キロの山道を歩かなければならない。彼等は、ほぼ朝の四時には家を出る。

ミンダナオ子ども図書館に住みこんで、小学校や高校に通っている子の多くは、こうした状況の子たちだ。

極貧のこうした家族にとって、最も脅威なのは病気だ

今年は、日本でも新種のインフルエンザが流行した。これはこちらでも同じで、ミンダナオ子ども図書館内でも、高熱を発する子たちが相次ぎ、二六名が医者にかかり、そのうちの半数ほどが入院した。

四月からこれを書いている九月までに、

マノボデーの練習風景

ミンダナオ子ども図書館が扱った患者数は、一四九名に登っているから、その多さは想像以上だ。

現在三六四名いる奨学生たちだけではなく、外部から運び込まれてくる患者、避難民キャンプで薬もなく困窮している患者、読み語りで行った出先で見いだす患者を加えると、確かに考えられる数字だが、それにしても多い。

医療費は、月々一〇万円を計上しているのだが、八月時点で十月までの予算を消化してしまった。これで、大きな戦闘でも起ころうものなら大変だ。なぜなら医療費の残を緊急支援費としてしばしば使っているからだ。（医療、読み語り、緊急支援は、自由寄付から計上）

上左の写真は、栄養失調で髪の毛が抜け始めたマノボ族の少女。

栄養失調で毛の抜けた少女

栄養失調で毛が抜けるとは思わなかったが、同時に体の抵抗力も無くなり、病気になるだけではなく、高熱が出ても何日も引かないで、やせ細っていくケースもある。

医者にかかることの出来ない貧しい人々にとって、病気はそのまま死に結びつく脅威だ。

病気がそのまま死に結びつく脅威であることを、貧しい人々は良く知っていて、もちろん、マナナンバルという民間医術師に、薬草治療や祈祷をしてもらうのだが、これではとても救うことが出来ない、または、自分自身治ることは不可能だと察すると、静かに諦めて死を待つ。

その潔さには、驚かされることがある。

医療が整っている世界であれば、どのような治療でも試みようとするだろうが、それが不可能な地域では、死は非常に身近な世界なのだ。それゆえ、抵抗したりせず、（出来るはずもなく）死を友のように受け入れようとする。

私たちも、患者に対しては、可能な限り尽くすのだが、極端な成長障害や心臓などの高額な医療患者には、手も足も出ない。入院治療を開始しても、亡くなっていく患者もいる。

救える患者や子どもたちが亡くなっていくのは、実に悲しく見るに忍びない。

現金収入が無ければ、出稼ぎに出ればよいのに、と思うかもしれない。

その通りで、フィリピンでは、海外に出稼ぎに行く人も多い。

しかし、例えパブで働くにしても、そのほとんどが高学歴（つまり大学を卒業した中流以上の人々）であることはご存じだろうか。パスポートやビザも含めて、海外に出稼ぎに出るためには、それなりの経済基盤がないと不可能なのだ。

極貧の先住民族に至っては、山から近隣の町に出るための乗り合いバイクのお金すらないのだから、夢のまた夢。

確かに、こういう人々を狙って、安い日雇い労働を提供するプランテーションもある。この近辺では、サトウキビ農場がそれで、ダンプに極貧の家庭の家族を乗せて農場に向かう。

その労働費は、日雇いで１３０円程度。こうしてわずかに得た現金は、現地での食費にほとんど消えて、子どもたちの待つ集落に帰っても、ほとんど一週間の米代にしかならない。特に、近年は、世界的な経済危機のため物価が値上がり。米は、８５０ペソだったのが、今は１５００ペソと倍近くなっている。

これも美味しいおかずになる

米だけではなく、塩、醤油、油といった調味料すら買うことが出来ない。ましておかずを買うことは不可能なのだ。そこで彼等が食べるものは、川でとったカエル、カニ、トカゲ。

それでも、日雇いながら仕事があった時は良かったが、現在の最貧困層の問題は、世界的な経済崩壊のために、こうしたプランテーション工場すら打撃を受け、雇用者を減らしていることだ。また、例え雇用があったとしても、様々な理由を挙げて賃金をより低く抑えていることも問題で、賃金が物価高騰にまったく追いついていかない。

最後に彼等に残されたサバイバルの方法は、赤子や子どもを抱えて歩いて遠い山道を町まで降りてきて、路上で物乞いをすること。

事実、クリスマスが近くなると、町に多くの物乞いが集まってきて、車の側で手をさしのべてわずかな現金をねだる。

病気のやせ細った赤子を抱いた母親、目の見えない老人、栄養失調の子どもたち。こうした風景は、いわばクリスマスの風物詩にまでなっている。

今では、ミンダナオ子ども図書館に住みこんで、皆さんのおかげで小学校や高校に通っている子たちの中にも、こうした経験をしてきた子たちが多い。

ご存じのように、ミンダナオ子ども図書館は、貧しい中でも極貧の、特に親のいない子、片親の子、崩壊家庭の子を対象としているからだ。

今年、ミンダナオ子ども図書館に住みこんで学校に通う滞在希望の奨学生が増え、なんと８０名ほどに達した理由も、こうした食べていけない子どもたちがドッと増えたからに他ならない。

これでも保育所？

これでも小学校？

保育所支援のお願い

フィリピン政府が、『保育所を経由しない子たちは、小学校に上がれない』と言う方針を打ち出して以来。
貧しい地域の子たちが、小学校にも入学できない事態が起こっています。
保育所は、村の予算で作られるために、村中心部の比較的豊かなクリスチャン系の子たちは、
りっぱな保育所に行き小学校に入学できるのですが、
へんぴな地域、山岳地域の子どもたちは保育所に通えず
（三,四歳の子が、どうして五,六キロの道を歩いて通えるでしょうか？）
学校に入学できない事態が起こっています。

ミンダナオ子ども図書館では、保育所建設を進めています。同時に、集落と関係を持ち、
建設後も読み語り、スカラシップ、医療活動を継続し、地域の発展に寄与しています。

Mindanao Children's Library Foundation, Inc.

貧しいからといって、必ずしも不幸とは限らない
私たちの生活の方が、豊かな国の人々の生活よりも
はるかに美しいと感じるときだってある。
けれども、どうにもならないのが、
お金が無くて学校に行けないときと
病気になっても病院に行けないとき・・・

ミンダナオ子ども図書館：支援方法

１、医療や読み聞かせ活動を支援して下さる方々へ・・・自由寄付

専用の振り込み用紙をご請求いただくか、下記の振替口座にお願いいたします。
寄付をいただいた方々には、若者たちの手描きのお礼の絵葉書と、ミンダナオより年四回季刊誌「ミンダナオの風」をお送りしています。

２，大学生高校生スカラシップ支援の方へ・・年額６００００円（月額５０００円）

振り込み用紙の通信らんに「スカラシップ」と書いて、一部振り込んでいただければ、年四回（一, 四, 七, 十月）の季刊誌に同封して、手描きの絵葉書を確認のためにお送りいたします。

３，里親支援（小学生）・・・年額２４０００円（月額２０００円）

振り込み用紙の通信欄に「里親」と書いて、一部振り込んでいただければ、年四回の季刊誌（一, 四, 七, 十月）に同封して、手描きの絵葉書を確認のためにお送りいたします。

スカラシップと里親支援は、年四回（一、四、七、十月）に、季刊誌と共に手紙や手書きクリスマスカード、写真、プロフィール、成績表などと共に届きます。文通可能、現地に来られた場合は家までご案内します。
詳しくはウエッブサイト（ヤフー検索：ミンダナオ子ども図書館）

４、保育所建設支援・・・30万円

振り込み用紙の通信欄に「保育所建設」と書いて振り込んでいただければ、年四回の季刊誌（一, 四, 七, 十月）に同封して、手書きの絵葉書を確認のためにお送りいたします。

郵便振替口座番号　００１００　０　１８０５７
加入者名　『ミンダナオ子ども図書館』

三菱東京ＵＦＪ　久我山支店　普４５９９４９９
ミンダナオ子ども図書館：日本事務局　山田順子

連絡先

現地携帯：(001010-63)－ (0)9219603640（松居友）
日本滞在中の松居友セルフォン：０８０５５０２３４４６
現地 Tel Fax:(001010-63)－ (0)64-288-5621
好評のメールニュース（無料）をご希望の方、松居個人にご連絡くださる方は
Ｅメール：mclstaff@zar.att.ne.jp
ウエッブサイト　ヤフー検索：『ミンダナオ子ども図書館』
日本事務局：東京都杉並区久我山２－１３－４－２０１
TEL：０９０－１２０１－８２９６　（山田順子）
FAX：０３－３２４７－４４０９
Mindanao Children's Library : Brgy. Manongol Kidapawan City Cotabato 9400 Philippines